

「梅棹忠夫著作集」全22巻解題：第14巻 情報と文明

著者	久保 正敏
ページ	138-138
発行年	2011-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10502/4858

情報と文明



梅棹理論の大きな柱である情報論から文明を論じるのが本巻である。本人の語る通り、オタマジャクシの社会性解析、知的生産の技術の案出、情報産業論の組み立て、研究・情報センターたる民博設立に至る氏の人生は、もっぱら情報の取り扱いに終始したと言える。

梅棹情報論の真骨頂は、送り手と受け手、両者の存在を前提とするそれまでのコミュニケーション論から脱して、情報の受信、発信、いずれの場合でも、相手の存在を前提としない、きわめてドライで主体的な情報のとらえ方にある。生物が感覚器官で受けた信号を咀嚼・解釈・編集したものが情報であり、こうした脳神経系における情報処理こそが生ける証しだと言う。コンニャク情報や情報の価値を論じた原点はそこにある。

受信における受け手主体の考えは、どんな知識欲を持つ入館者が主役のビデオテーク、すなわち現在で言うビデオオンデマンドの発案にも生かされた。情報を発信するのも、アマチュアリズムに基づく自己表現の欲求からであり、相手が存在するかは問わないと喝破した。現在のブログ時代はこれを示す。

蓄積したデータを編集することが情報創出であり、その素材としてのアーカイブズの重要性を説き、アーカイブズたる博物館や図書館の区別はあいまいになると予見した。現在議論が進むMLA (Museums, Libraries and Archives) 連携は、まさにこの方向に向く。

ところが、自身の膨大なアーカイブズを残したご本人が、脳内の情報で充分だとして、少年期の動植物標本コレクションを惜しげもなく手放した。情報だけでなく唯一のモノが持つありがたみ(アウラ)を大事にせねばならぬ博物館ではかなわぬことだし、モノと情報の両立は、依然、民博の課題だが。

最終章では、遊牧文化に範をえたものか、コレクションという所有欲から解き放たれた爽快さが語られる。膨大な知の引き出しを脳に収めたまま逝かれた氏の辞世の言葉とも思えるこの感慨は、読む者の心を爽やかに吹き渡る。(久保正敏)